
賢姫の秘密

黄昏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

賢姫の秘密

【Nコード】

N5853X

【作者名】

黄昏

【あらすじ】

貴族令嬢のルチアは悩んでいた。

「……頭が良さげだと男性に敬遠されるから頭が悪いフリをしてるのに、ロリータっぽいせいで言い寄ってくるのはロリコンばかりか、ありえない……！」

頭の良さは隠したいけど、勉強だってしたい。そんな彼女の考えた作戦とは……？

不定期更新です。よろしくお願いします。

そのいち。

「女の子が、あんまり賢すぎるのはねえ……ちよつと、鼻に付く感じで嫌だわ。嫁ぎ先がなくなってしまうかもしれないしねえ……」

苦笑気味に言うその声を聞いた幼い日の私は、『頭の弱い貴族令嬢』を演じることを決めたのだった。

+

+

+

「おとーさまあ、おかーさまあ、おはようございますう」

……この死ぬほど鬱陶しい喋り方が、今の私の喋り方だ。
正直言つて、自分でもトリハダ物な訳だが。

しかし、悲しいかな、私の外見的に、こんな舌つ足らずの気色悪い喋り方が許されてしまう。

出るところの出ない幼児体型、同世代の誰よりも低い背丈、極めつけはぷっくりとした頬に大きな目。

……もう18歳になるのに、12、3歳にしか見られない。そんな子供っぽい外見なのだ。

この外見のおかげで、未だに結婚できない。

だって寄ってくるのはロリコンばっか。いくら条件の良い相手でも、ロリコンはさすがに頂けない。

賢すぎると結婚相手が寄ってこないから馬鹿のフリをしてるのに、最悪だ……

「おはようルチア、今日もとっても可愛いね」

「本当、ルチアは私達の天使ね！」

……デレデレと相好を崩す両親。ちなみに、二人とも普通に美男美女。

お母様は16歳の時まで酷く幼い外見だったというから、私の成長が遅いのは多分お母様の遺伝。

強く伝わり過ぎの遺伝を心の底から恨みたい。お母様は恨まないけど。

ちなみに二人とも年齢を感じさせない外見だ。20代の、下手すれば前半くらいに見える。

お祖父様とお祖母様もやっぱり見た目が若いので、これはもう諦めるしかないのかもしれない。

はあ……

「ルチア、手が止まっているわ。どうしたの？食欲がないのかしら？」

「ま、まさか風邪か！？誰か医者を呼べ！診療の手配を！！」

私が朝食を食べる手が止まったのを、体調が悪いせいだと勘違いしたお父様が、焦った様子で医者の手配をしようとしたので、私は必死で止めにかかった。

「もお、おとーさまったら、違いますう！わたし、今日はお友達のところ遊びに行くからあ、楽しみでぼーとしちゃったのお！」

……この口調じゃ、必死さも何も伝わらないけどね……
ぷうつ、と頬を膨らませて見せると、両親は顔を綻ばせた。
うええ、自分の喋り方と仕草がキモすぎて有り得ない……軽く死にたくなるわ。

「そうか、そういえば以前から約束していたな。楽しんでおいで」
「暗くならないうちに帰ってくるのよ？知らない人に話し掛けられたら、すぐに逃げて護衛を呼びなさいね」
「はあい！夕方には帰りまあす！」

……お父様もお母様も、本当に私を子供扱いだな……
まあいい。今日は、ずっと考えていた“あの計画”を実行するのだから。
私は急いで朝食を平らげ、よそ行きのドレスに着替えて馬車に乗り込んだ。

+

+

+

「ルチア！いらっしやい。もう、遅いじゃない！」
「ごめんティア、これでも急いだんだけど」

私の目の前でぷんすかしている金髪グラマー美女。彼女は私の親友で、おバカ演技仲間のティア。
二年前に、その美貌とおバカ気味な演技で今の旦那ーヴィルヘルム伯爵のハートをガッチリキャッチし、玉の輿に乗った、ある意味恐ろしい女。
ちなみに、彼女の実家は男爵家。家格としては2つも上の相手に嫁いだのだ。

…あの時はちょっとした身分差恋愛ブームまで起きて、社交界がプチパニックに陥ったんだっけ。

「ほらルチアったら、マイワールドに浸ってないで！そんなんじゃいつか演技がバレるわよ！ほらほら着替えなさい！」

「あー、はいはい！分かってるから！」

ぐいぐいと服を押し付けられて注意力散漫を指摘された。演技がバレるとかある意味恐ろしい事を言うな。

心の中でぼやきつつも、手際よく着替えてゆく。

重苦しいドレスを脱いで着たのは――その辺の良家の男の子が着ていそうな、シャツと半ズボン。

少しだけしていた化粧を落として、結っていた髪を解き、首の後ろで束ねる。仕上げにコートを羽織れば、貧相な体つきも相まって、可愛らしい顔立ちをした少年の出来上がりだ。

「ティア、これでどう？」

「良いんじゃない？男の子にしては可愛らしすぎかもしれないけど。――にしてもあんた、こんな計画、よく実行する気になったわよね」

思い付いても実行しないわよ、とティアが笑う。

私の計画――それは、男の子のフリをして図書館に行き、お馬鹿演技をしていたら到底読めないような本を読む事だ。

お馬鹿な貴族令嬢でも読むような小説は読み飽きた。だって私には簡単すぎる。もっと難しい本が読みたい。歴史書や戦略書、古典文学も、学術書だって読んでみたい。男性しか読めない本を、私だって読んでみたい。

だから、私は男の子のフリをして図書館へ行こうと思った。

バレたら色々とマズいのはわかっていているつもりだ。私は頭でっかちのおかしな令嬢と後ろ指を指されるだろうし、両親もきつと、そんな娘を育てた親として世間から嘲笑を受ける。

……だから、やるならバレないように徹底的に、と決めた。

今日、この家にはティアの一番下の弟が来ている。

引っ込み思案で大人しい彼は、お嫁に行ってしまった大好きな姉を慕ってやってきた。しかし今日は姉の友達が来ていて、人見知りする彼は、友達が帰る夕方まで図書館で時間を潰す、という筋書きだ。

ちなみに、弟くんは大好きなお姉様のためなら、と喜んでこの計画に参加してくれた。

彼はこれから、ティアの部屋でティアといっしょに遊んで過ごすそうだ。

彼の外見的特徴は私とかなり似通っているので助かった。まだ社交界にお披露目してないから、色々とごまかせるし。

「……じゃあ、行ってくるわ。弟くんによろしくね」

「はいはい。バレないようにね！」

ティアに用意してもらった馬車に乗り、私は図書館へと向かった。

そのに。

「うわぁ……」

凄い。

見渡す限り、本だらけ。

私は幸せを噛みしめながら、まずは歴史書を読もうと、歴史書の置かれていた一角へと向かった。

+

+

+

「……」

貪るように本を読む。

やっぱり面白い。来てよかった。

現在、私の脇には歴史書が積まれている。本を読むのは早いので、山になっても普通に読み切れるけど、さすがに返しにいかないalmazいかな……

丁度八冊目を読み終えたので、今まで読んだ本を持って棚へ向かう。

このシリーズの本は、奥から二番目の棚にあったはずだから……

「よししょ……つと」

ずり落ちかけた一番上の本に手を添えて抱え直す。一冊一冊がそこそこ分厚いので持ちづらい。

目的の棚のあたりに着いて、さてどこに置いてあったか、と辺りを見回す。

……あ、あそこだ。何冊分かのスペースがある。
多少ふらつきながら移動し、本を戻そうと――

……どうしよう。両手で本を抱えてないと、重くて落としてしまうかも……

両手で抱え込んで運ぶだけでも重労働だったのに、片手で本を持つなんて到底無理だ。

床に本を置くのは駄目だろうしなあ……

「……おい」

「うわぁ！って、わわっ」

危ない、本をぶちまける所だった……

ギリギリで惨劇を阻止して声を掛けてきた人を見ると、私より遥かに背の高い男性。

うらやましい……じゃなくて、なんで私に声を掛けたんだこの人。本を落とす所だった。

「……何か？」

「いや……本を戻すのに難儀しているようだったから、手伝おうかと」

話しながら、ひよいひよいと私の持っている本を棚に戻していく。ありがたいけど……驚かせないで欲しい。

「ずいぶん実用的な本を読んでいるな。これはここにある本の中でも判りづらいたく言われる。だが、脚色が少なく、正確さは群を抜いて高い。」

「そうなんですか。この辺りにある歴史書のさわりを読んでいて、一番好感が持てたからこれにしたんですが、意外ですね」

「俺としてもきちんとした歴史書を見分けられないのか、と貴族の坊ちゃん達にキレたくなる。ちなみに、坊ちゃん達に人気のあるヤツはこれだ。」

棚から引き抜かれた本は、私が切り捨てたうちの一冊。
これ、描写がやたらキラキラしく、かつファンタジックで、床に叩きつけてやろうかと思ったヤツだ……

「世も末ですね」

「全くだ」

彼は深い溜め息を吐いた。

——とゆうか

こいつは誰だ。

「あの、ずいぶん本に詳しいようですけど……司書の方ですか？」

もしそうだったら羨ましい。

だって、司書ならずと書物に触れていられる。

「残念だが違うな。司書になりたかったんだが、家業を継いだ。」

「そうなんですか」

という事は、貴族か商人の長男だろうか。

服もいいものを着ているし、知識人のようだし。

まあ、名前は聞かないでおこう。厄介ごとには巻き込まれたくないし、私もできれば名乗りたくない。

「……そういえばその本、今何巻まで読んだんだ？」

「さっき八巻を読み終わりました。あと二冊ですね。一時間半もあれば読み終わるか」と

「あとどれくらいしたら帰る？」

「えーと……五時には帰る予定なので、あと三時間です」

最近は日が落ちるのが遅いから助かる。

おかげで長時間本を読んでいられるし。本当にありがたい。

「……では、読み終えてから討論しないか？最近学者でもないとかこういう本を読んでいないからな。意見を聞きたい」

討論！

やってみたい。他人の意見を聞ける機会なんて、めったに無いと思うし。これから先、男装して図書館に来る事はひょっとして無いかもしれない。あったとしても、こういう人がいるとは限らない。

「分かりました。じゃあ集中して読むので、しばらく待っていて下さいね」

「ああ。有意義な時間が待っているのだから、いくらでも。」

早足で本棚の森を抜けて、自分の席へ向かう。

後ろから彼が着いてきているのを見て、ちよつと気分が浮き立った。読み終わったらこの人とたくさん討論できる。

大きな椅子に腰掛けて、私はさっそく歴史書に手を掛けた。

そのさん。

最後の一文を目でなぞり、私は大きな溜め息を吐いた。
長かった。難しかった。でもそれ以上に、面白かった。

「――読み終わりました!!」

「早かったな。じゃあさっそく、始めるか」

向かいの席に座っていた彼が、心なしか嬉しそうにこちらを見る。

「よし、じゃあ一卷の80ページ、ザグレーブの戦についてなんだが――」

「描写に不明点はありませんが、それ以前の記述からしてこの時点でこの戦法は存在したのか――」

「しかしこの戦法は少し前の時代の戦術書に類似点のみられるものが――」

「しかしこれではさすがに――」

「この点についてはこちらの説の方が正しいのでは――」

互いに一步も引かない議論。楽しい！

徹底的に疑問点について話し合う。時には二人で本文を見返したり、他の歴史書と突き合わせて見直してみたりして、より一層深く真実を追求していく。

時間が飛ぶように過ぎていって、気が付けば既に五時が近くなっていた。

「あ、すいません、そろそろ時間が……」

「もう五時か……もっと話し合いたかったが、仕方ないな。」

「すいません……」

「いや、いい。楽しかった。しかし、君は賢いな。12かそこらにしか見えないのに。惜しむらくは、歴史以外の知識が乏しいことだな。次に来た時には、他の書も読んで勉強しなさい。君はもっと、賢くなれる。精進しなさい。」

「……！はい！」

誉められた！私より遥かに頭がいいであろう、この人に！

どうしよう、凄く嬉しい。

また、ティアに頼んでここに来よう。しばらく間が空くかもしれないけど、必ず。

「頑張って勉強します！また討論したいです！」

「期待しているぞ。俺も、討論に備えて勉強しないとな。君の意見は斬新で面白い。言い負かされないようにしないとな」

にやり、と笑った彼は、私の頭に手を置いて、髪をぐしゃぐしゃと撫で回した。か、髪がっ……！

「悪い、ずいぶん綺麗だったから、つい。茶色にところどころ金
が混じっているのか。不思議な髪だ」

「そうですか……こういう髪、珍しいんですか？」

「まあ、そうだな。あまり見ないものではある。」

そういえば、あまりこういう頭の人はいないか。両親や、ティアの
家族も色の混じった髪だから、気にしたことは無かったけど。

「だが、君を見つけるととき分かりやすくいい。俺は顔覚えが悪い
からな」

「髪が目印ですか……」

複雑な気分だ。いや、あまり顔を覚えられても困るから、別にいいんだけど。

……うん、なんか微妙。

「まあ、いいです。迎えも来てしまったみたいなので帰りますね」

「ああ。またな……じゃじゃ馬姫」

「?……なにか言いましたか?」

「いや? 気を付けて帰れよと言っただけだ。」

「お気遣いありがとうございます。じゃあ、また」

一礼してから、図書館を出て来た時と同じ道を辿って馬車の元へと帰る。

ティアの家の御者さんに促されて馬車に乗り込み、赤く染まり始めた空を見ながら、私は気付かないうちに、彼の事を考えていた。

+

+

+

「おとーさまあ、おかーさまあ、ただいま帰りましたあ」

あの後、ティアの家に一度戻って超特急で着替えた私は、再びお馬鹿の仮面を被って自宅へ帰ってきたのだった。まる。

……正直疲れてて、演技も面倒だけど、お馬鹿演技は既に体に染み付いていたようだ。なんだか虚しい。

「ルチア！お帰りなさい。ルチアがいない間、お母様とっても寂しかったわ」

「お帰り、ルチア。お父様も寂しかったよ」

駆け寄ってきたお父様とお母様に、左右からぎゅうぎゅうと抱き締められる。ううう、息苦しい……

「ふええ、苦しいですう、おとーさまあ、おかーさまあ……」

「うわあ、ごめんよルチア！つい、愛が溢れてしまったんだ」

「ごめんなさいね、機嫌を悪くしないで？ほら、夕食にしましょう。今日はルチアの好物ばかりにしたからね」

両親に全力で機嫌を取られる十八歳って……というか食べ物で娘を釣ろうとしないでお母様……

心の中で盛大な溜め息を吐きながらも、私は夕食に釣られたふりをして、食事部屋へ向かった。

side ??? (前書き)

男性サイドのお話です

side ???

変わった女に会った。

今日、仕事を終えて、母方の祖父が管理している国立図書館に、久々に本を読みに行った時の事だ。

読み返したい歴史書がごっそりと無かった。

普通の本なら、『ああ、借りられたのか』で終わるのだが、その本は研究者でもなければ読まないような、難解なものだ。一般の利用者ならまず借りない。

研究者が借りていったのなら当分返って来ないだろうから、諦めて他の本を探そうと踵をかえした時。

そいつが視界に入ってきた。

何冊もの本を両腕で抱え、ふらつきながらこちらへ向かってくる。仕立てのいい服を着た、愛らしい顔立ちの……少年、なのか？

少年というには顔立ちが柔らかすぎる。背丈からして12、3歳くらいだろうから、まだ女の子のように小さくて可愛らしくてもおかしくはないが、何か違う。

普通、12歳くらいの男なら、もっとやんちゃだ。そうでない大人しい奴もいるが、そういう奴も、もっと子供っぽい。それに、こんなに服の上からでも分かるくらい細くもない。頬だってもっとすつきりとし始めるし、骨格もしっかりしているだろう。

まさか……こいつは女か？

にわかに興味が湧いて、困っている様子のそいつを、棚に隠れて観察することにした。

すると、そいつはさっきまで俺が立っていた棚の前まで歩いてくる。その棚には、俺が読もうと思っていた歴史書以外に借りられている本など無かったはずだが……

——こいつが借りていたのか！？

棚の前で困っている様子のそいつが抱えている本をよく見ると、確かに見慣れた装丁だ。

あまり読まれないため、殆ど薄れていない箔押しタイトルが見える。

どうやら、間違いないようだ。

俺は、そいつに声を掛ける事にした。

「……おい」

「うわぁ！って、わわっ」

俺に気付いていなかったのか、そいつは盛大に驚いて本を落としそ

うになった。何をしているんだ……

大きな緑色の目が恨めしげにこちらを見上げている。とりあえず本を戻すのを手伝ってやると、少し雰囲気緩和だ。

「……ずいぶん実用的な本を読んでいるな。これはここにある本の中でも判りづらいたく言われる。だが、脚色が少なく、正確さは群を抜いて高い。」

「そうなんですか。この辺りにある歴史書のさわりを読んでいて、一番好感が持てたからこれにしたんですが、意外ですね」

あつさりと言われて驚いた。こいつは何なんだ。まさか若いながらも研究でもしているのか!?

――もの凄く、興味が湧いてきた。

折りを見て、あとどれくらいここに居るのか尋ねて……できれば、少し話したい。

「……そういえばその本、今何巻まで読んだんだ?」

「さっき八巻を読み終わりました。あと二冊ですね。一時間半もあれば読み終わるか?」

「あとどれくらいしたら帰る?」

「えーと……五時には帰る予定なので、あと三時間です」

三時間か。なら、ちょっとした討論くらい出来るだろう。

「……では、読み終えてから討論しないか？最近は学者でもないとか、こういう本を読んでいないからな。意見を聞きたい」

そいつの目がパツと輝いた。……俺は不覚にも、ドキッとした。一体どうしたんだ俺。

「分かりました。じゃあ集中して読むので、しばらく待っていて下さいね」

「ああ。有意義な時間が待っているのだから、いくらでも。」

こいつと話すのは、面白そうだからな。

足早に本棚の間を抜けていくそいつを追って、向かいの席につく。意気揚々と本のページをめくり始めたそいつを眺める。ふっくらと柔らかな弧を描く頬はうっすらと赤みがさし、ちいさな唇は淡い赤色。くるんとカールしたまつげに縁取られた瞳は透明感のある緑色。その髪は、珍しいことに金色と茶色の毛が混ざり合った、不思議な色合いをしている。

さらに、なにやらほんのりと甘い香りもする。香水の人工的な匂いとは違う、良い香り。

——やっぱり、こいつは女だ。

俺はそう、確信した。

+

+

+

「――読み終わりました！」

パツと顔をあげるそいつは、今から始まる討論が楽しみでならないのか、浮かれた様子だ。

「早かったな。じゃあ、始めるか」

「よし、じゃあ一卷の80ページ、ザグレーブの戦についてなんだが――」

「描写に不明点はありませんが、それ以前の記述からしてこの時点での戦法は存在したのか――」

「しかしこの戦法は少し前の時代の戦術書に類似点のみられるもの

が――」

「しかしこれではさすがに――」

「この点についてはこちらの説の方が正しいのでは――」

俺が話を振ると、即座に返事がくる。

どうやらこいつはかなり賢いようだ。言う事全て理にかなっているし、間違ったことも言わない。話せば話すほど、なにやらこいつに惹かれ始めてしまった。

ただ、知識が歴史以外の部分に関して多少浅いようなのが残念でならない。もっと、いろんな事を話したい。

夢中で話していたせいか、五時はすぐに来てしまった。

あいつが帰るときにアドバイスをして、あと、少し誉めてやると、とても嬉しそうにしていた。

どうしよう。

あいつの笑った顔も、拗ねたような顔も、可愛くて仕方ない。賢いところも、気に入ってしまった。かなり好みかもしれない。

決めた。

――あいつを、俺のモノにしてやる

あんな女、二人といたいだろう。絶対落とす。落としてみせる。

俺は唇に笑みを浮かべ、手の者にあいつの素性を調べるように言った

――待ってろよ

必ず、捕まえてやる。

ばんがいへん。 『**t r i c k o r t r e a t ?**』 (前書き)

ハロウィン短編です

時間軸はちよつと未来？

本編とは何も関係ない（と思われる）ので、おまけ程度にお楽しみ下さい。

それでは、どうぞ！

ばんがいへん。『trick or treat?』

「trick or treat!」

街のあちこちではしゃいだ声をする。

相も変わらず図書館に向かう馬車の中、私は手に持った籠に目をやった。

中には、手作りのパンプキンパイが入っている。

今日、早起きして作ったものだ。

「……喜んでもらえるかな」

甘さは控え目に作ってみたけど。

男の人は甘いものは好きじゃないかな……

「だめだったら……ま、いっか」

もし何も言われなかったり、彼がきていなかったりしたら、ティア

と二人で食べればいいし。

到着を告げられて、私は馬車を降りて図書館へ入っていった

+

+

+

図書館に入る。彼はいないようだ。

とりあえず籠を机に置いて、本を探すことにした。

「これと、これと……あとはこれ、かな？」

今日は民族学のつもりなので、それらしい本を数冊選んでいく。こんなものかな？

本を抱えて席に戻り、読み始める。時間を忘れて読んでいると、誰かが後ろに立つ気配が……

「……t r i c k o r t r e a t ?」

「うわああああ！」

耳元で囁かれて驚いた。椅子から転げ落ちそうになった私を支えた手の持ち主は。

「な、何するんですか！心臓が止まるかと思いました！」
「それは失礼。でも驚かすつもりでやったからな。反省はしていない」

いつもの彼だった。とゆーか、反省はしてくれないのか。ぜひしてほしいところなんだが。

「じゃあ、改めて。お菓子をくれないと、悪戯するぜ？」
「はいはい……じゃあ、これをどうぞ。」

用意していた籠を渡す。中をのぞき込んだ彼は、意外そうな顔をした。

「これ、もしかして手作りか？」
「なんで意外そうな顔するんですか？そうですよ。朝、作ってきました。」

何故分かったんだろうか。明らかに不格好な出来でもないはずだけど。ひよつとして変なところが焦げてたとか？

「意外じゃないが、こんなに上手く作れたとはな。プロが作った感じではないが、十分綺麗だ。」

「ありがとうございます。」

ちよつと嬉しい。

料理人さんにわざわざ演技して頼み込んだ甲斐があった。
この様子だと、甘いものも平気みたいだし。

「……じゃあ、私からもいいですか？」

「どうぞ？」

「お菓子くれなきや、悪戯しちゃいますよ？」

ちよつぴり上目遣いで言ってみる。演技と言うほどでもないが、ちよつとからかうつもりで、可愛らしく。

効果はあったみたいで、彼の表情に僅かに動揺の色が伺えた。うん、満足。

「……じゃあ、これを。」

「ありがとうございます。……あれ？これも手作りですね」

可愛らしく包装されてはいるが、僅かに不格好なそれが手作りであることは一目で分かった。

「ああ、これは兄とその婚約者が、手作りしたいと言い出したからな……」

「そうなんですか。」

「……作るとは言ったものの、二人ともいまいち地に足が着かない類の人たちでな……作っている最中にいちゃつきだして、俺と、手伝ってくれた料理人がもの凄く苦労した……」

「それは、お疲れ様ですね。でも仲睦まじいことは良いことだと思いますよ」

それからしばらく、彼がクッキーを作る過程に起きた事件を色々聞いた。

なんでも、生地を作っている時にいちゃつきだしたせいで、近くにあった水差しを倒したり、生地を焼いている途中でいちゃつきだして、生地を焼いている事を忘れ、焦がしかけたりしたそうなの。

……仲がいいのは良いことだが、調理中は止めとけよ、と思った。

調理中の余所見、ダメ、絶対。怪我に繋がるからね。

「まあ俺の愚痴は置いておくとして。せっかくだから食べないか？
晴れているから、中庭あたりで」

「あ、いいですね。そうしましょう。多分、籠にお茶が入ってますから。」

ついでに民族学について話しましょう？と言うと、楽しそうな顔で、是非とも、と言われた。

こうして、私のハロウィンは過ぎていくのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5853x/>

賢姫の秘密

2011年10月31日20時10分発行